

八たび歌よみに与ふる書

連載第八回

正岡子規

前回は、悪い歌の例を挙げたので、今回は善い歌の例を挙げさせていただきます。悪い歌といい、善い歌といっても、四つ五つばかりの歌を挙げたところで、私の意を尽くせるものではありませんが、ないよりはいいものと思つて、いささか歌を並べてみたいと思います。まず、『金槐和歌集』などから始めることにいたします。

武士あひのの矢並やなみつくらふ小手の上かたに霰あられたばしる那須なすの篠原

という歌は万人が口をそろえて褒めたたえておりますので、いままさとりたてて申し上げなくてもいいのですが、なお気が付かないこともあるかもしれませんとも思うゆえ、ひとまず申し上げておきましょう。この歌の趣はだれもおもしろいと思うようですし、またこのような趣向が和歌にはきわめて珍しいことも知らない人はないようで、さらにまたこの歌が強い歌であることもお分かりになつていらつしやるようであります。この種の句法がほとんどこの歌だけに見られるような特色を示していることはあまり知

られていないように思われます。普通は、歌は、「なり」「けり」「らん」「かな」「けれ」など助辞をもつて繋ぎとりもたれることにより、名詞は少なくなるのが常なのに、この歌に限っては名詞がきわめて多く、「てにをは」は「の」の字三、「に」の字一と少なくなっています。さらに動詞も二個でしかも現在形で最も短い形にしております。このように助辞、動詞などを最小限にして、材料で充実している歌は実に少ないものです。新古今集の中には材料が充実していて、句法が緊密である点で、似た歌がありますが、この歌のように言葉言葉がそれぞれ活動して充実感を出しているものはありません。万葉集の歌は材料はきわめて少なくして簡素素朴さを以て勝るものであり、実朝は一方でこの万葉の歌を擬して習得してはいるのですが、一方ではこのような破天荒な歌をも作っているのです。その力量は実に測りたいほどの優れたものと言えましょう。

実朝はまた晴天を祈る歌に

時ときによりすぐれば民たみのなげきなり八大竜王やめたまへ

というのがあり、おそらくは世の中の人から好まれない歌だとは思いますが、これは私が好きで好きでたまらない歌なのであります。このように勢いが強く、恐ろしいまでの歌はまたとないもので、八大竜王を叱咤する怒り、竜王りゅうおうをも懾伏しんぷくさせようとする勢いが、両方現れております。

「八大竜王」と八字の漢語を用いているところと言い、兩やめたまへと四三の調を用いているところと言い、皆この歌の勢いを強めるために用いられているのです。初三句はきわめて拙い句となっておりますが、一直線に言い下しているのです、その拙いところがかえって真心から偽りのないところを示していて、晴れを祈る歌としては、最も適当な姿と調べとなつてゐるのです。実朝自身は、もとより善い歌を作ろうとしてこれを作つたものではなく、ただ真心から詠み出したものでありましようが、結果的に実に善い歌となつております。このあたりは、小手先の器用さを弄し、言葉のあやつりにのみこだわっている現代の歌読みどものとうてい思い至るようなところではありません。三句切れのことはなお他日つまびらかにしたいと思います。三句切れのまま今三句切れの歌にぶつかつたので、一言だけ申しておきましょう。

三句切れの歌をおきましよう。三句切れの歌を詠むなどと言うのは、守株の論で、論ずるには足りませんが、三句切れの歌は尻が軽くなる弊害があります。この弊害を避けるために、下二句の内を字余りにすることがしばしば見られます。この歌もその例の一つです（前に挙げた大江千里おおえのちきよ「月見れ

正岡子規



おきましよう。三句切れの歌を詠むなどと言うのは、守株の論で、論ずるには足りませんが、三句切れの歌は尻が軽くなる弊害があります。この弊害を避けるために、下二句の内を字余りにすることがしばしば見られます。この歌もその例の一つです（前に挙げた大江千里おおえのちきよ「月見れ

物ものいはぬよものけだものすらだにもあはれなるかや親おやの子を思ふ

また

のように何も珍しい趣向もないのですが、一気呵成のところがかえって真心を現して余りがあります。ついでに字余りのことをちょっと申し上げましよう。この歌は第五句が字余りになつてゐるがゆえにおもしろくなつてゐます。ある人は字余りは仕方なくするものと心得ていますが、そうではなく、字余りにはおよそ三種類あります。第一は、字余りにしたためにおもしろくなつてゐるもの、第二は字余りにしたために悪くなつてゐるもの、第三は字余りにしてもしなくてもどちらでもいいものと分かります。その三種類の中でも、この歌は字余りにしたためにおもしろくなつてゐるものです。もし「思ふ」を詰めて「もふ」と吟じてしまうと、興が醒めてしまいます。ここは必ず八字に読むべきところです。またこの歌の最後の句のみに力を入れて「親の子を思ふ」と詰めたのは、情の切実なところを表すもので、もし「親の」の語を第四句に入れて最後

短歌季評

五十嵐勉

の句を「子を思ふかな」「子や思ふらん」などとしてしまうと、やさしい調子になってしまつて、切なる情は現れず、平凡な歌になってしまつてしまうでしょう。歌読みが古来助辞を濫用することは、宋人が虚字を用いて弱い詩を作るのと同じです。実朝のような歌人は、実に千古に一人いるかいないかの存在と思われまふ。

以前から私は客観詩のみを重視する者と誤解されている

ようですが、そうでないことは右の例でお分かりになるはず。那須の歌は純客観の歌、あとの二首は純主観の歌で、ともに愛唱している歌であります。しかしこの三首だけでは、強い歌だけに偏っているようですので、また強い歌だけを好むように考えられてしまつてもいいかもしれません。なお多少の例を挙げますので、お待ちいただけただけなら幸いです。

(明治三十一年三月一日／『日本』掲載)

(現代語訳／五十嵐勉)

今回は「NHK短歌」を取り上げてみる。二〇二四年六月月号を開いて、まず目に飛び込んでくるのは、きれいなカラー写真である。青い背景に雨の落下が乱れる写真は美しいが、それがあまりに大きいため、比重が視覚に偏り過ぎて、歌が沈んでしまつている。「巻頭秀歌六月米川千嘉子選」とある。また写真に添えられた歌は、新古今和歌集の式子内親王の歌「声はして雲路にむせぶほととぎす涙やそそぐよるの村雨」である。歌は一見悪くなく、観念の奥行きを深くしているが、村雨の雨脚がほととぎすの声を消してしまうのではないかという無理な重ね過ぎが歌意を濁しているものの、古典の格調はまあ伝わってくる。問題は、なぜこれを巻頭に持つてくるのか、ということである。古典

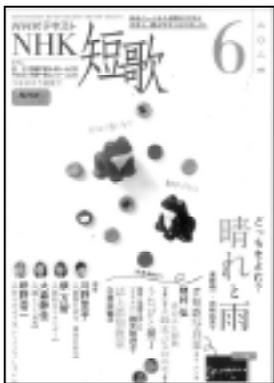
に頼らなければならぬほど、後ろに続くものがお粗末なのか、あるいはこの季節、六月号として雨の短歌を持つてくるのに、断じてこれではいけないページ目を飾れないと判断したのか、どちらかと推量する。後者だとした場合、「村雨」とはつきり言っているのは、そぐわない。村雨がそのまま梅雨に繋がるのは無理で、梅雨はしとしと続く長雨に対し、村雨は「ひとしきり強く降つてくる雨」なので、六月の季節には合わない。とすれば、その意図は前者になる。そう思つてページをめくると、案の定、お粗末な現代短歌が二首載つている。これもデカイ写真に添えてある。「おろおろと『オレオレ』の声に騙さるる 蔑してならず 愛の愚かを」黒木三千代『草の譜』で、夕焼けのような砂

浜にたくさんの旧式電話機が転がっている写真の人工的な作像は、歌意に合っているのかいないのか、首を傾げる取り合わせである。歌はよくない。古典と並べると現代の歌がいかに落ちているかが歴然とする。

その左ページも写真があり、これは旧式の扇風機が影を深めていて、その上に「小石にて砕けんものをある男鏡の中に重畳挙げす」渡辺松男『牧野植物園』とある。意味がよくわからない上に、六月にふさわしい歌にも思えない。さらに扇風機がどう関連するのか想像が繋がらない。

次ページは二ページの広さを取っている林の緑の中の麦わら帽子の写真があるが、これに二首の短歌が添えてある。一首は「函館の青柳町こそ悲しけれ／友の恋歌／矢車の花」、もう一首は「らっきょうもオクラもみょうがも君に会い初めて食べた薄暑の野菜」とある。右は「オッ、いな」と思つたら石川啄木の歌、左は「なんだ、コレ?」と思つたらカンハンナ『まだまだです』という歌人の歌。歌になつていない。啄木の歌と並べられてよく恥ずかしくないなどと思う。

ここまで見て、現代の掲載短歌のお粗末さを埋めるために写真でごまかし、さらに古典や明治短歌で、糊塗する意図が見え透いてくる。短歌だけで勝負で



きないんですね。これがNHK短歌なんだな、とまず興奮めになる。

テキスト企画として「『晴れと雨』どっちをよむ」を四ページにわたつて歌集めをしているが、この企画の立て方もおかしい。歌はそのときに応じて自然に湧いてくるものだらうから、こういう枠組みを固くして歌つたり集めたりしても、作歌を育むものにはならないだらう。

放送の教材として使うのか「光る愛の歌／嫉妬はエネルギー」の表題で俵万智が「誰かさんの次に愛され一人より寂しい二人の夜」『チヨコレート革命』と持つてきているが、これはNHKの日曜大河ドラマの源氏物語に合わせた組まれているので、その意図がまず薄汚い。また本当の嫉妬はこんなものではないはずで、オニヤンコクラブ程度のレベルの俵万智の歌では、肉薄できないだらう。

公募の領域で題が決められていて、それに応募して一席、二隻、佳作・入選が決められているが、その題の選び方がひどい。川野里子「プラスチック」、大森静佳「アクセサリー」、俵万智「手紙」で、こんな題にいくら意を注いでもいい歌は生まれないだらう。これで序列や成績が決まってしまうのは嘆かわしいことである。とても教育雑誌とは思えない。

結論的には、「NHK短歌」も「朝日歌壇」などと同じに、日本の短歌をダメにしている。